

平成 2 2 年度
岩手県高等学校教育研究会農業部会
第 2 回農業教育研究会

テーマ

「豊かな人間性を育み、生徒一人ひとりの個性の伸長を図るキャリア教育はどうあればよいか」

期日：平成 2 2 年 1 2 月 1 6 ・ 1 7 日（木・金）

会場：サンセール盛岡・岩手県立盛岡農業高等学校

担当校：岩手県立盛岡農業高等学校

発表校：岩手県立北上翔南高等学校

1 研究のねらい

本校におけるキャリア教育の実際をまとめる。視点は、「各校における特色ある教育について」とした。

私は本校赴任1年目、ということであり、今回、特にキャリア教育に関して、本校の指導体制や生徒の実態、学校をとりまく周辺環境について、まず理解をするということが、今回の研究の第1のねらいとした。そのことを踏まえ、学校として、または、農業教科・農場としてどうあるべきか、ということ、今後、検討・実践していくという計画になるだろう。

特に、担当している「産業社会と人間」についてを中心として研究していく。

2 研究・指導の方法

まず、進路状況について、本校卒業生の進路は大まかに言って、7割進学・3割就職である{資料1}。分野別に見ると、総合学科であるので、多岐にわたる分野に進んでおり、細かく見ると、例年同様という部分と、年度により差異がある部分とがある。

本校の特徴の一つとして、就職率が高いということがあげられる。平成18年度以来、最終的な就職率は100%である。今年度においても、近年の景気低迷と労働市場の厳しさから全国的に新卒者の就職状況は大変、厳しくなっている。本校でも厳しいながら、今年度、10月上旬で、
県平均50%弱の時、本校では63%
(1次選考結果)と
上回り好調、12月
1日現在で95%に
達している。

◎昨年度、農業に(若干なりとも)関連があると思われる進路先
岩手ヤクルト、小専商店、キクコーストア、東北佐竹製作所、にまいば
しミート、花巻農協、築地江戸銀、日本レストランシステム、フーズネット、
升本フーズ、ヤマザキナビスコ
山形大学農学部、前橋工科大学生物工学部、宮城学院女子大学食品栄養、
玉川大学生物環境学部・生命化学部、盛岡調理師専門学校、北日本ハイテ

また、進学については就職と比べ、全体的に売り手市場であるが、学力そのものがどうかという問題があるだろう。進学については、未だ一般入試が残っているとはいえ、12月1日現在での進学合格率は87%で、ほぼ好調である。

このように、本校の進路状況を数字で見ると、良好であることがわかる。その理由には、学校全体が進路に向いていることと、基本的に進路全般に渡る進路指導課の努力がある。そして、総合学科高校としての理由をあげれば、第一に、総合学科特有である総合的学習の時間の存在があげられる。その他、課外の実施などもあげられる。

3 指導展開(実践)

(1) 総合的学習の時間

現行の学習指導要領によると、総合的学習について

①社会生活や職業生活に必要な基本的な能力や態度および望ましい勤労観、職業観

の育成

②わが国の産業の発展とそれがもたらした社会の変化についての考察

③自己の将来の生き方や進路についての考察及び各教科・科目の履修計画の作成を内容とする「産業社会と人間」（以下、ここでは産社と略す）

④自己理解や進路学習に関する講義、職業体験実習、外部講師の講演

なお、総合学科において、「産業社会と人間」を1年次に履修するとある。

(2) 1年次「産業社会と人間」

1年間の計画は、資料2のとおりである。ほぼ計画どおりに実施されてきている。キャリア教育に関係すると思われる指導項目は、「働くとは何か？」などというような進路へ向けての姿勢についてのもの、自己理解や進路に合わせた系列の事など自身の進路についてのもの、外部講師による講話、という内容に分類される。いくつかの項目は、進路指導課と連携しての内容となっており、やはり、キャリア教育的な内容が多く組み込まれている。

年間72予定時間のうち、自己理解や適性探し、進路先の実際的な理解の学習について、年間53時間かけて、特に学習しているということは、進路について重点的に学習されており、キャリア教育を押し進めている。

その内容としては、講演を聞く形式、生徒が自ら課題に取り組む形式などがあるが、具体的には多くの場合、自己評価票 {資料3} にそってメモを取り、当該時間の自己評価をつけ、最後に感想や反省を作文するという授業形態になっている。

(3) 2年次「総合的学習」

2年次についても、「産社」を継続し、発展・確立するため、1単位時間実施されている。キャリア教育に関連する項目は、年間29回のうち、13回程設定され、行われている。{資料2}

(4) 3年次「課題研究」

テーマは多岐に渡っており、各自が研究していく。年度の最終に、発表会があり、そこで、発表する。中には、面接の際の話題となったり、さらに、大学で研究を深めようとする生徒もいる。

(5) 農業科目について

履修対象は、2・3年次。環境系列が主であるが、他の系列からも履修している。

平成22年度の科目は以下のとおり。

果樹3年	草花3年	果樹2年	草花2年	農業機械
植物バイオテクノロジー	生物活用3年	生物活用2年	グリーンライフ	
農業科学基礎	食品製造			

のべ181名 実人数91名

{全校生徒707名 (712) 2年231 3年233 (1年243名)}

(6) 他に

- ア) 事業所見学会：岩手ヤクルト工場、他7事業所。2年次59名参加
- イ) インターンシップ（インターンシップ 充実支援事業）：2年次の希望者が参加、幾額かの県予算アリ
- ウ) LHR：数回の進路項目
- エ) 課外授業等

4 分析

「産社」年間の流れは、高校と自己の理解→進路に応じた履修→進路について考える→社会や地域を知る→進路について考える→自己目標の設定 となり、学習をとおして進路目標が設定されるようになってきている。「産社」（および「総学」）の効果には、どのようなことがあるだろうか？

- 作文能力の育成
- 毎回の提出物を出す習慣づけ
- さまざまな方面のプロの方々からの話しによって、見識が広まる
- 自分の適性を再確認または意外な面を知る
- 職業について広く知る
- 自分探しの方法を知る

また内容的にも、自己理解と他者理解、コミュニケーション、情報教育、役割、進路設計、職業群の理解と選択、が組み込まれ、キャリア教育的な教育であることがわかる（課題解決能力については、3年次に）。以上のように体系的に学習している。

しかし、課題としては、1・2年では座学や講習会など、机上の学習が中心となっていることである。それを補い、アップするのが、インターンシップ、事業見学などである。3年次については、「課題研究」で主体的に学習する。さらに、農業や家庭を履修した生徒については、実践的・体験的な学習、特に実習を積むということになる。

農業科目については、科目によって生徒の目的に差異がある。また、全般的に、興味については良好であるが、それを進路へ結びつけるかどうかは、生徒によると思われる。{資料4}

5 今年度の課題とまとめ

本校は7割が進学であり、主たる目標は進学達成である。また、土曜や長期休業中の課外授業が盛んに行われ、土日課題は毎週必須である。

キャリア教育は、進路指導とほぼ同義であるが、特に体験的学習が含まれるというイメージがある。これに該当するのが、農業や家庭などの実習であり、キャリア教育には有効であろう。実際に、当教科を主体的に学ぶ、環境系列には就職者が多い。また、進学であっても、最終的には就職するのであり、その意味で、高校段階でのキャリア教育を総合的

学習で行う総合学科教育には、非常に効果があるものである。

ところで、本校では地域や他組織との連携の一つとして、小学生の総合学習における田植えと稲刈りに対し水田を提供している。その際、該当時間に当たった科目の本校生徒に小学生の指導補助をさせている。その時には、授業で見せる姿とは別に、主体的に指導しようとする姿が見られ、たいへん有意義な教育場面であると感じた。先生や職業現場から学ぶという受け身の形の他に、指導するという能動的な場面を設定させるのも、たいへん有効なキャリア教育である。

本校、水田については、学校としては、将来的に維持管理の面から縮小・廃止の方向にあるようである。しかし、本校の米は、翔南米として品質が良く、各方面でたいへん好評である。また、以前、体験的学習として「産社」の時間に田植えや稲刈りをさせていたようであり、再び復活したいという声も聞かれる。キャリア教育という観点からだけでは、水田は現状維持が良い、ということになる。しかし、「産社」での農作業は実際面で難しく、現状の体制が適当であろう。

また、課題の一つとして、進路に生かす資格取得を農業科目にどう取り入れるか、など、今後いくつか検討しなければならないことがあると思われる。

おわりに、就職にせよ進学にせよ、将来的なことを考えると、キャリア教育は必要である。普通教科の学力向上を主とする中ではあるが、進学校とは異なり、キャリア教育について配慮されている総合学科は、有意義な教育体制としてその特色を発揮している。

